

▼CNCP からのメッセージ

「つなぐ」運動は、楽しく、面白く
そしてくたびれないように！

シビル NPO 連携プラットフォーム 代表理事
山本 卓朗



新年明けましておめでとうございます。

激動の 2020 年から新しい年を迎えました。依然としてコロナ過の脅威が続いていますが、その中でも、はやぶさ 2 カプセルが宇宙の砂をたくさん持ちかえるなど、心躍る快挙もありました。世の中悪いことばかりではない！ということを実感しましたね。

昨秋は自粛のかたわら澄んだ空気を求めて近郊の低山に。新年のご挨拶に秋晴れの富士山をお目にかけてみましょう。

さて CNCP は今年も「土木と市民社会をつなぐ」を活動理念として元気に頑張っていくと思っていますが、“つなぐ：繋ぐ”という活動は、ものづくりと比べると成果が見えにくいだけにとっても厄介なテーマです。数年前に、何人かの方に協力いただき、活動のキャッチコピーを作るワーキングをやりました。名付けて「ひろげる・つなぐワーキング」。“広報”というと一方的に伝えようという感じがあり、双方向のコミュニケーションを目指す言葉としては物足りない。それで“つなぐ”を加えました。でも“広報+

繋ぐ”とすると途端に一筋縄ではいかななくなることは、本通信で紹介している事例（例えば 79 号で上園さんにご紹介いただいた土木学会シビル NPO 推進小委員会の活動や 80 号でご紹介いただいた土木学会コンサルタント委員会の「土木ふれあいフェスタ」、社団法人ツタワールドボクの片山さんの北九州市で橋桁架設を見事にライブイベントに仕立てたお話など）でよくわかります。最近では行政の組織でも“つなぐ”ことの重要性を意識した活動が増えていますが、一般的な“広報”に留まっているのは、実行する体力不足とまだまだ認識不足かと思われます。

東日本大震災の前後数年、土木学会のトップマネジメントに関わりました。私の使ったキーワードは、

- ・土木工学は歴史的に非軍事工学の総称としての市民工学である。
- ・にもかかわらず、土木と市民社会にはかい離がある。
- ・市民工学への原点回帰をすすめよう。

というものでした。当時は“かい離がある”という表現に違和感を覚える方が多く、私たちは十分市民社会のために活動していると。でも、震災での復旧活動の報道で自衛隊の活動が脚光を浴び、復旧道路の櫛の歯作戦など地域建設業の不眠不休の活動が殆ど報道されなかったことから、コミュニケーション活動構築の議論につながりました。

大震災から早くも 10 年、私は“土木と市民社会をつなぐ”活動は、運動論と考えています。運動ですから、地道に積み上げていくことが基本で、線香花火的なイベントでくたびれ果ててはいけません。楽しく、面白く、が抜けたら決して長続きしないでしょう。CNCP 通信も田中新事務局長の肝いりで 79 号からスタイルを一新しました。楽しい通信としてさらに充実できるよう、皆様のご支援をお願いいたします。

